

断章 旭川のアイヌ語地名研究

74

高橋 基

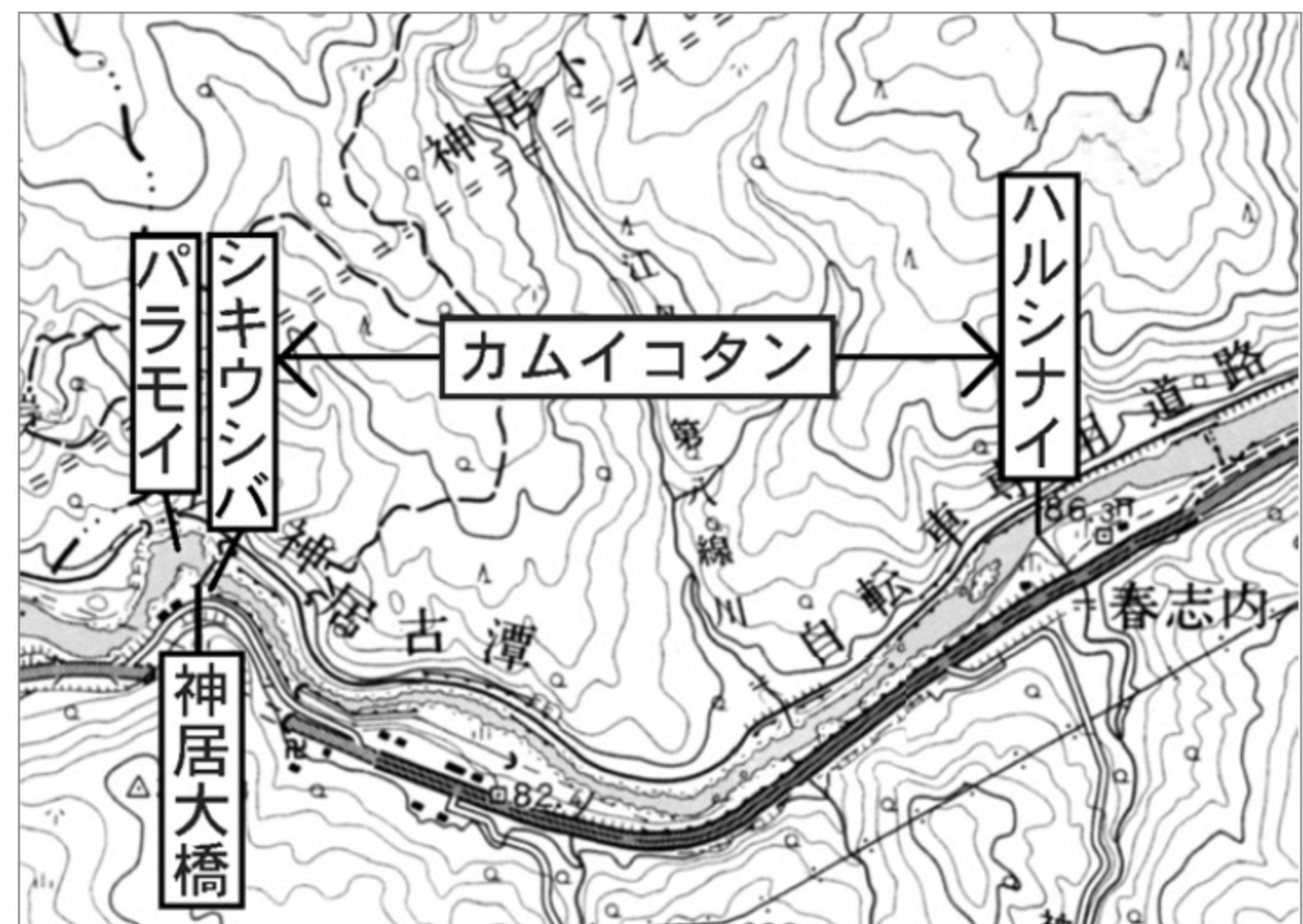
明治二年八月十五日、蝦夷地を北海道と改称し、全道を十一カ国八十六郡に設定、旭川は石狩国上川郡となった。この原案は松浦武四郎によってなされたもので、当連載③9でも紹介したが、松浦武四郎は、石狩国上川郡は、「上川郡―本川筋(註・石狩川筋)神処(註)より惣て上をさして一郡に仕候。上川筋、本川筋村々多く、チクベツ、ビ、ベ、ツ等相分り申候へ共、惣名を当時上川と相唱候事に御座候。」と、松浦武四郎の案は、石狩川の現称の神居古潭から上流を石狩国上川郡としたもので、それが現在の原型になっている。

永田方正は、明治二十四年刊の『北海道蝦夷語地名解』の国郡の「上川郡」の項で、重要な記録を記している。すなわち、

「上川郡―原名ペニ・ウン・グル・コタン(peni-un-guru-kotan)と云ふ。上川人の村と云ふ義なり。アイヌ古へより本郡神居村字カムイコタンより上流のアイヌをペニウングル(peni-un-guru)川上の人」―上流人の義と云ひ、此処より下流をパニウングル(pani-un-guru)川下の人」―中川人の義と云ひ、石狩河口をパラトウングル(parato-un-guru)広い川口の人」―川口人の義と云ふ。今、石狩郡に花畔村あるは、パナウングル(pana-un-guru)川下の人」の誤りにて下流人の義なり。」

永田方正は、アイヌの人たちは、昔からこの石狩川の最大の難所、天険の地―カムイコタンから上流の人をペニウンクル(peni-un-ku)川上の人」と言い、その人たちの住む所をペニウンクルコタン(peni-un-ku-kotan)川上人の村」と言ったので、上川郡と命名されたというのである。

―旭川のカムイコタン③1―



ハラモイと神居大橋

右の上川郡由来記を含めて、これまで石狩川最大の難所であるカムイコタンの、江戸末期から明治二十年代までの踏査記録と、カムイコタンの伝説を中心に紹介してきた。しかし、カムイコタン―神居古潭には、まだまだ紹介していない沢山の魅力がある。

往時の神居古潭での花見や紅葉の最盛期には、旭川から臨時列車が出て、大変な賑わいだったという。神居古潭の生き字引の南山商店の南山恵美子さんや、神居古潭開基百年記念誌『足跡』編集部長だった増茂聡さんにお話をお聞きすると、例えば、花見の時期のヤツメウナギのカバ焼きの売れ行きは、想像を絶するものだったと懐かしむ。

現在も神居古潭の魅力は沢山あり、まずは、今年、第五十七回を迎える、秋分の日「こたんまつり」がある。カムイノミ・イナウ式の中で、国が指定した文化財の「アイヌ古式舞踊」が、旭川チカップニアイヌ民族文化保存会の皆さんによって披露されたり、その他盛り沢山のイベントが行われる。

まず、今年、第五十七回を迎える、秋分の日「こたんまつり」がある。カムイノミ・イナウ式の中で、国が指定し

た文化財の「アイヌ古式舞踊」が、旭川チカップニアイヌ民族文化保存会の皆さんによって披露されたり、その他盛り沢山のイベントが行われる。

北海道の指定文化財では、既に紹介した、昭和三十二年指定の「神居古潭 堅穴住居遺跡」、また、旭川市指定文化財では、「鬼の足跡」で紹介した、昭和四十一年指定の「神居古潭おう穴群」、平成三年指定の「旧神居古潭駅舎」があり、そして、平成九年には、これらをひっくるめて、神居古潭は、「旭川八景」に選ばれている。

その上で、平成十九年には、神居古潭は、「日本の地質百選」に選定された。これを受けて、一昨年からは、神居古潭を中心とした「旭川ジオパーク」構想が誕生し、活動を開始している。ジオはギリシャ語で、「地球」の意味。ジオパークとは、学術的に価値の高い地質や地形などを保全・活用し、教育や観光などに役立てる自然公園のことをいう。

「日本ジオパーク」には、全国で三十地域があり、北海道では、既に、洞爺湖有珠山(「世界ジオパーク」にも認定)、白滝、アポイ岳、三笠の四カ所が認定されている。旭川市でも、官民あげて認定に邁進して、是非実現してほしいと願う、「旭川のカムイコタン」の項の結びとしたい。

(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第1週号に掲載します